

蕨野の棚田物語

岩本英樹(佐賀県唐津市)

- 第1章 はじめに
- 第2章 大山神社
- 第3章 すえいし居石という名字
- 第4章 棚田の成り立ち
- 第5章 江戸時代の生業
- 第6章 神仏の建立
- 第7章 明治維新
- 第8章 溜池の築造
- 第9章 棚田の拡大
- 第10章 唐津炭田と棚田
- 第11章 減反政策
- 第12章 全国棚田連絡協議会による棚田を守る活動
- 第13章 中山間地域等直接支払制度のスタート
- 第14章 棚田ウォークによる交流活動の展開
- 第15章 佐賀大学農学部手間講隊による棚田保全活動
- 第16章 むすび

第1章 はじめに

おじさん、私に蕨野の棚田のことについて教えてください。蕨野の棚田は石積で段々の田んぼになっていて、平地の田んぼと違って、わからないことがいっぱいあるので、蕨野の棚田のことについて私に教えてください。

そうだな、おじさんが蕨野の棚田の知っていることを話してみよう。次のとおり第2章から第16章で区切って説明するね。

第2章 大山神社

蕨野集落では、今も、年に2回、春祭りとお祭り^{まつ}が集落総出で開催されています。この祭りは、集落の守り神様である大山神社を祀る行事で、春祭りでは、神主さんにより神事を行い、八幡岳から神様を蕨野集落へ降りていただき、これからの田植え及びお米の収穫を無事にいくように神様に見守っていただくように祈願する祭りです。そして、秋祭りでは、お米が収穫できた感謝を神様へ伝える祭りで、蕨野浮立を大山神社へ奉納します。神様は、秋祭りを終えた後に、八幡岳へとお戻りになります。

大山神社は、江戸時代の元禄7年頃(1694年)に建てられています。今も、蕨野集落の守り神として集落全体で祀られています。

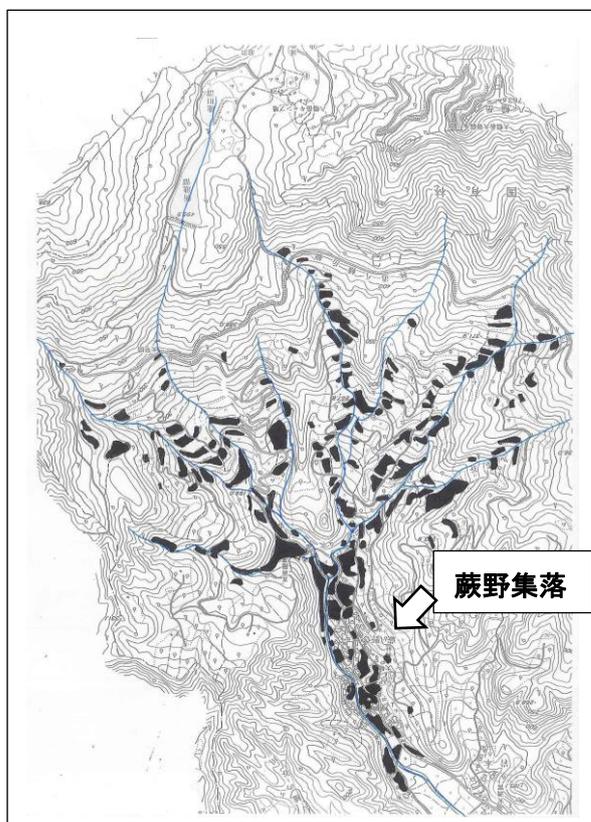
第3章 ^{すえいし}居石という名字

蕨野集落の名字は主に、^{すえいし}居石家、川原家、土井家、中山家、百武家、秀島家などがあります。居石という名字は、古くは据石と書かれていました。名字の由来は、先ず土地の呼び名が付けられて、その後、その呼び名は土地に住む人の名字にあてられています。場所は特定できませんが、室町時代の天文14年(1545年)には平山上城、下城が築かれており、その城主は居石兄弟でした。蕨野集落が属する地区は平山とよばれていました。当地の地形から、岩石

を取り除いて、必要に応じて石を据えなければ人々の生業が成り立ちませんでした。八幡岳（標高 764m）は標高 400mより上部は、火山でできた玄武岩からなり、大昔、地震などにより山崩れにより山麓には岩石が堆積しています。農業をするにしても屋敷を作るにしても岩石と格闘して石を据えなければいけません。そういう土地柄から据石という土地名が付けられたと想像できます。

第 4 章 棚田の成り立ち

江戸時代には蕨野の棚田面積は約20ヘクタールありました。



左図の黒塗りの箇所が、江戸時代に棚田があった場所です。当時、溜池は築かれていませんでしたので、お米作りには欠かせない水がある所、小河川の側や湧き水が出ている所に棚田が造られています。江戸時代にあった棚田が現在までその当時の形で残っているのはほとんどありません。ほとんどが明治以降に棚田を拡大するために元の棚田の畦畔を壊しています。ただ、蕨野の羅漢を建立された居石伝左衛門さんの棚田は当時のまま残っています。

第5章 江戸時代の^{なりわい}生業

江戸時代、蕨野集落では、お米、紙、木炭、薪などが生産されていました。これらの生産物には、年貢としてお上に上納しなければいけませんでした。年々、年貢の上納率は高くなり、6割がお上で4割しか農家には残らず苦しい生活を強いられていました。

第6章 神仏の建立

蕨野の住人たちは、家族が幸せに暮らせるように、また、先祖があので安らかに過ごせるように、神様や仏様を建立して、お願いをしてきました。江戸時代の元禄7年(1694年)大山神社の建立、享保17年(1732年)に観世音菩薩の建立、天明7年(1787年)には稲荷宮の建立、寛政元年(1789年)には蕨野羅漢を建立してきました。文政12年(1829年)には蕨野浮立を作り大山神社へ奉納しました。

蕨野羅漢の建立の経緯は、ある夜、居石伝左工門の夢枕に弘法大師が立たれて「十六羅漢を建立して、国の栄え、地区の繁昌、身の冥加を祈るように」とのお告げがありました。新人深い伝左工門さんは、牛津町の平川与四工門に頼んで、弘法大師、観世音などの諸仏と十六羅漢像を彫っていただき当地に寛政元年(1789年)に建立しました。その後、唐津の豪商達により諸仏の寄進があり「蕨野の五百羅漢」と呼ばれるようになりました。現在も、居石伝左工門さんの子孫の居石家が引き続き祀られています。また、居石伝左工門さんの時からある棚田が字石盛にあり、当時のままの形で棚田が残っていて、当時の棚田風景を見ることができます。

これらの神仏を建立するためには相当の費用もかかり、日頃から節約をして蓄えていたお金を建立費用にあてました。蕨野にも当然、年貢はかけられていましたが、蕨野の田は、気候条件も寒く、お米を作った後には裏作が作れなかったことや、平坦地と比べてお米の収量も少なかったことから年貢が平地と比べて緩和されていました。そういうこともあり、神仏の建立費用にあてることもできました。江戸時代のお米作りは大変苦勞がありました。雨不足や虫の被害など自然にさからえないお米作りなので、度々、飢饉に見合わされました。

第7章 明治維新

明治維新により、殿様の命令には絶対従わなければいけなかった封建制度から国民は全て平等という近代国家に変わりました。農民への政策も変わり、年貢を辞めて土地に税金をかける政策に転換しました。江戸時代には水田への肥料や牛馬の飼料として利用していた草刈り場は庄屋が管理していましたが、明治になると草刈り場であった原野は農家へ払い下げられました。農家は、家族を養うために原野を購入して棚田の拡大を行うようになりました。

第8章 溜池の築造

お米作りで一番大事なものは水です。明治になり棚田を拡大するようになってから用水確保のために、集落全体で溜池新築をすることになりました。2か所の溜池を新築し、1カ所は明治18年に着手して3カ年で完成しています。もう1カ所は昭和7年に着手して途中で中断もありましたが13年の歳月をかけて昭和20年に完成しています。2か所の溜池工事は全て人力でした。蕨野集落から溜池工事場所までワラジを履いて5kmの坂道を歩いて行かなければいけませんでした。集落全体の工事でしたので若い娘さんも作業をしました。当時は、今と違って寒さが強く、溜池作業で一番きつかったのは、厳寒の中での作業でした。素足でワラジを履いて作業しますので足には赤切れや霜焼けができ、痛さをこらえながら作業をしていました。昭和20年に完成した溜池は池新溜池と名付けられています。この溜池工事のかかわった組合長は居石源治郎さんで、溜池の完成の思いを短歌にしています。「永世まで 残れと築きし溜池は 十三年の間の 汗のしずくぞ」

第9章 棚田の拡大

明治になり原野の払い下げを受けた農家は、家族を養うために棚田の拡大と溜池の新設を進めました。棚田の拡大にあたっては、3通りの方法がありました。一つ目は、江戸時代までであった棚田の畦だけを壊し田を壊さずに側の原野を棚田に広げていく方法です。二つ目は、棚田

と棚田の二つの棚田を合体させる方法です。三つ目は、新たに原野を棚田にしていく方法です。

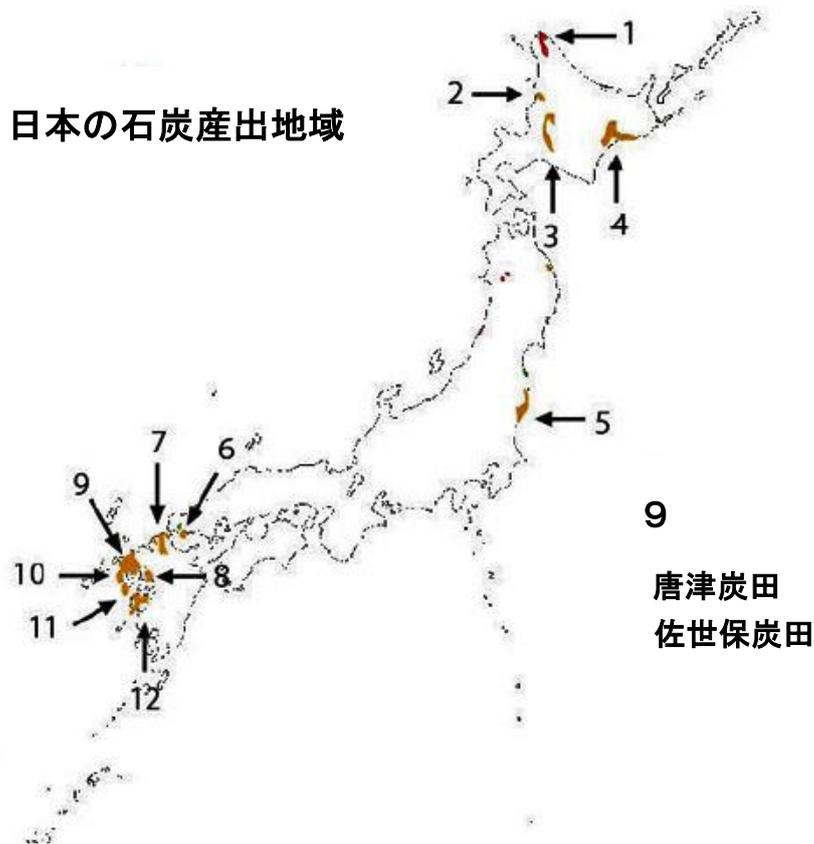
棚田を拡大していくためには、課題もあり課題解決のための工夫と技術力が必要でした。そして、大変な労力をともないました。お米作りに最も必要なものは水の確保ですので、棚田を造る際には用水の確保はもちろんのこと自分の棚田だけで用水を使わずに下の棚田へ用水を流すように棚田を造っていかねばなりませんでした。その解決策として、棚田の下を通す暗渠を考えました。この暗渠という考えは、江戸の元禄時代に建立された大山神社の階段の下に水を通す暗渠があります。棚田でもこの考えを参考にして暗渠を棚田に設置しました。この暗渠により上の棚田から下の棚田へと用水することができ、水田の面積を広くとることが可能となりました。また、水田を広くすればする程、棚田の石積の高さが高くなります。農民の中には手先が器用な方がおられるもので、石積が上手な方は石垣棟梁いしがきとうりょうと呼ばれて石積の指導者として活躍しました。

明治以降の時代は戦争の時代でもあったことから食料増産、産業振興が叫ばれいて、近隣には唐津炭田があり産業機械も進んでおり、棚田造成道具の鉄製品の普及やダイナマイトでの岩石破壊など利用することができたことなどによって棚田造成が進みました。

棚田の造成は人力でしたので、家族や親せきだけの労力だけでは不足し、他の農家の助けも必要でした。そのため、「講こう」という組織を作りました。この「講こう」は、10人位で組織され、Aさん、Bさん、Cさん、…、Aさんの棚田を造成する時に他の仲間も手助けするという組織で、その翌年はBさんの棚田に手助けに行くものです。早く「講こう」を取った農家は、その分多く手助けに行かなければならないという決まりでした。また「講こう」の決まりには、棚田が完成した時のお祝いの席にはあまり贅沢にならないようにお祝いに持っていく品も細かく決められていました。

第10章 唐津炭田と棚田

藤野の近隣には、相知町、北波多、巖木町と石炭の産出地域がありました。



唐津炭田の石炭層は九州の石炭産出地域の中でも地上より浅い位置にあったことから江戸時代から産出されていました。鹿児島県の薩摩藩にも蒸気軍艦の燃料として当地から石炭を搬出もしていました。

明治以降は、戦争の特需として石炭産業により地域は栄えていました。人口も多く、国の食糧増産の振興により、お米の増産も求められました。蕨野の棚田の拡大も昭和 20 年の終戦を迎えるまで棚田の拡大が進められました。

第11章 減反政策

戦前は食料不足であったために米の生産量を増やしていきました。しかし、戦後の昭和 35 年頃から国では米が余るようになり、米の生産量を減らさなければいけないようになりました。そこで国は、昭和46年(1971年)に減反政策を取らざるを得なくなりました。減反政策で米を作らない水田に畑作物を作るようにすすめ、協力した農家には補助金を支給しました。この減反政策や、米余りによるお米の価格が下がり続け、そして棚田での後継者不足などによって、蕨

野の棚田面積も最大約54ヘクタールあったのが、現在では約30ヘクタールまで減少しています。

第12章 全国棚田連絡協議会による棚田を守る活動

全国の棚田で、減反政策の影響と米価格の低迷、そして困難な棚田の作業などにより棚田が荒れてきていました。先人が苦勞してきた大切な棚田をなんとか未来へ継承していこうと知識人や自治体首長が立ち上がって平成7年(1995年)に全国棚田連絡協議会が設立されました。この協議会によって棚田保全のための全国棚田サミットを始め様々なイベントの開催や国への要望などが取り組まれて、今日の棚田保全へとつながってきました。蕨野の棚田でも、第10回全国棚田サミットを当地で開催することができ、蕨野の棚田を全国へ紹介することができました。

第13章 中山間地域等直接支払制度のスタート

棚田だけを対象にした国の支援制度は初めからあった訳ではありませんでした。全国棚田連絡協議会の会長であった藤寛西有田町長が、ヨーロッパの国では実施されていた所得補償制度の導入の働きかけを、棚田の役割と価値を全面に出してながら強く行われてきた結果が、棚田に対する全国の世論と追い風に相まって、国が棚田にとって画期的な中山間地域等直接支払制度を平成11年(1999年)にスタートさせました。蕨野の棚田にも同支援が適用されて今日まで支援を受けています。

第14章 棚田ウォークによる交流活動の展開

蕨野の棚田を舞台にしたイベントは、平成13年(2001年)に開催した第1回早苗と棚田ウォークが最初でした。これは、当時の大草秀幸相知町長がこれからの地域活性化のため、蕨野の棚田を全面に出して進めていこうと、町長自ら旗を振り進められました。この第1回ウォー

クには九州内外から 900 名の参加者があり、蕨野棚田のすばらしさをPRできたことが蕨野集落の自信ともなり、このウォークは現在も地元開催で継続されています。大草秀幸相知町長はこのイベントを皮切りにして様々な棚田活性化策のために尽力され、蕨野棚田米販売のスタート、佐賀大学農学部との蕨野棚田保全協定締結、蕨野棚田交流広場の建設、第 10 回全国棚田サミットの開催など、行政と地元と一体となって棚田振興に取り組まれました。

第15章 佐賀大学農学部手間講隊による棚田保全活動

平成 15 年には、大草秀幸相知町長と佐賀大学農学部の五十嵐勉教授によって、佐賀大学農学部と相知町との間で蕨野棚田の利活用を柱とする地域交流協定を締結しました。佐賀大学側は、農学部の学生さんを中心に手間講隊を結成し、7,000 m²の耕作放棄地を手間講隊の作業により水田へと復活させました。また、手間講隊は、田植え前の横溝の泥上げなど地元作業にも応援をし、また、秋には、灯りコンサートの開催をし地元農家の慰労を兼ねた収穫祭を開催するなど、若い学生さんによる地元交流によって蕨野集落を活性化しています。現在、地域交流協定は初期の目的を達成したので解消していますが、手間講隊は規模を縮小しながら、五十嵐教授を中心に活動を行っています。

第16章 むすび

蕨野の棚田の振興は、平成 13 年から大草秀幸相知町長の活躍により、棚田ウォークなどの都市住民との交流を始め様々な活動がなされてきました。また、佐賀大学農学部手間講隊の結成、蕨野棚田米を販売していく蕨野棚田保存会の結成、NPO 法人蕨野棚田を守ろう会の結成、これらの組織と蕨野区と一緒にあって蕨野棚田を守ろうと活動しています。

蕨野の棚田は、全国的にも棚田の規模が大きいことから平成 20 年に国の文化財「重要文化的景観」に選定されています。蕨野の棚田を守っていくためには、担い手不足などによる耕作放棄地の拡大など懸念され、今後とも厳しい状況が続くことが予想されます。

そういう状況であっても、これからの私たちは、先人が苦勞して築き上げた蕨野の棚田に思いをはせ、全国の仲間と共に知恵を出して、蕨野の棚田を守っていきたいものです。